2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
経営学部 地域ビジネス学科	准教授	寺島 雅隆
最終学歴	学　位	専門分野
中京大学大学院 経営学研究科 博士後期課程修了	博士	経営学

Ⅰ　教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

（理念）

学生に真面目に接し、信頼する。

（目標）

産業社会に有用な人材育成に寄与すると共に、学生の学力向上と健やかな学生生活を支援する。

（方針）

社会科学的知見に基づいて、ドクマ（信念）を極力排除する。

（計画）

・個々の学生のニーズを把握し、より勉学意欲を向上させる。

・ゼミナール学生に「オンリーワン」の獲得を促す。

・教員と学生間、および学生間の信頼をより培う授業運営を心掛ける。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

ビジネスモデル構築論、アントレプレナーシップ論、起業論、イノベーション論、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ

（後期）

東邦プロジェクト A, ビジネスモデル構築論、組織行動論、地域企業フィールド調査、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅱ

○教育方法の実践

東邦プロジェクト A において、クラウドファンディングに挑戦したが、2 グループが目標金額を達成した。一つは日本モンキーパークの猿舎に対してエアコンを贈与する案件であり、もう一つは地域の児童施設に図鑑等を贈与する案件であった。

○作成した教科書・教材

なし

○自己評価

理論と実践の両輪を少しは駆動させることによって、学生と大学に寄与できたと考えている。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

障害者雇用、障害者起業に関すること。

○目標・計画

（目標）

障害者雇用と障害者起業の背景に焦点を絞り、計画的に著作をおこなう。

（計画）

・今年度中旬に著作を出版する。

・その成果の一つとして、吉林大学主催の中日韓青年フォーラムにおいて学術発表をおこなう。

○2015 年 4 月から 2023 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

・寺島雅隆『救貧の正当性－なぜ障害者を救うのかー』デザインエッグ社、2022 年 8 月

・寺島雅隆『障害者の経営学-雇用から起業へ』三恵社、2022 年 3 月（第 2 版）

・大島武,寺島雅隆,畠田幸恵,藤戸京子,山口憲二『ケースで考える情報社会-これからの情報倫理とリテラシー』三和書籍、2015 年 3 月（第 3 版）

（学術論文）

・寺島雅隆,鄭南「日本残障者就业现状及相关社会政策支持研究」『社会政策研究』No.19(02)、pp.66-78、2020 年 2 月（査読あり）

（学会発表）

・寺島雅隆「Disability Employment」城乡文化社会转型与东亚青年发展在线研讨会、吉林大学哲学社会学院、2022 年 8 月

・寺島雅隆「ボーカロイドによる授業―言語障害者の試みー」日本ビジネス実務学会第 36 回全国大会、神戸大学、2017 年 6 月

（特許）

なし

（その他）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

なし

○所属学会

障害学会、日本中小企業学会、日本経営学会、日本ベンチャー学会、日本ビジネス実務学会

○自己評価

自ら納得のいく単著を出版することができた。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

建学の精神に則り、真面目に業務にあたる。

（計画）

・与えられた職務を全うする。

・委員会に関連する業務をおこなう。

○学内委員等

保健・学生相談センター運営委員会、地域創造研究所運営委員会

○自己評価

保健・学生相談センター運営委員会は1回も休むことなく業務を全うした。ただ、地域創造研究所運営委員会は葬式によって1回休むこととなった。また1年目の業務のため、貢献できたとは言いかねる。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

授業を通じて地域貢献活動を模索する。

（計画）

ゲストスピーカーの方々と関わり、学生と取り組めるプロジェクトを模索する。

○学会活動等

・日本中小企業学会　中部部会に参加した。7 月 16 日　愛知淑徳大学星ヶ丘キャンパス

・障害学会　全国大会にオンラインで参加した。9 月 17 日

・日本中小企業学会 全国大会に参加した。 9 月 24 日・25 日　東洋大学白山キャンパス

○地域連携・社会貢献等

・ゲストスピーカーとして、のべ9名の起業家を含めたビジネスパーソンを授業に招くことができた。

○自己評価

社会参画をしたが、それが成果に結びついているとは言い難い。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

障害者として、業務に支障をきたさないように通院等、自己管理をしっかりおこなう。

Ⅵ　総括

滞りなく、業務を推進できたことが何よりである。授業と社会の関りでいえば、「東邦プロジェクト A」を通じて学生がクラウドファンディングを達成し、社会貢献できたことが成果であった。学生の奮闘が素晴らしかった。

以　上